

まちひとしごと

Vol. 52

倶知安町スポーツ少年団
本部長 廣瀬 文夫 さん

楽しむ心を大切に 子どもたちと活動が続ける



倶 知安町出身の廣瀬文夫さんは、学生時代、夏は野球や陸上、冬はスキーをするなど、体を動かすことが好きだったという。

高校卒業後は自衛隊に入隊し、真駒内駐屯地などでの勤務を経て、倶知安駐屯地での勤務となり地元に戻ってきた。

「子どもの頃は、冬になったらスキーをすることが当たり前でした。今とは違いリフトも無かったので、自分でスキーを担いで山に登り、滑って降りてきたのは良い思い出です」

子どもが小学生のときに、ス

ポーツ少年団に入団したことをきっかけに少年団と関わりはじめ、現在は、倶知安町スポーツ少年団の本部長を務める。子どもたちの活動では、いつも元気をもらっていると話す。

「最初は保護者として見守るだけでしたが、次第に活動に関わるようになりました。少年団では、結果だけを求めるのではなく、『あいさつ』や『楽しむ心』を大切にしています。楽しければ長続きするし、長くやっていれば自然と向上心も生まれてきます」

昨冬の北京五輪では、クロスカントリースキー少年団が、スポーツ少年団のOGである前田沙理選手と住吉輝紗良選手を応援するのぼりやポスターなどを作製。廣瀬さんは、その応援活動の中心的な役割を担い、五輪で活躍した両選手へ応援の気持ちを届けた。

「応援グッズを作る際には、子どもたちにも意見を出してもらったりなど、協力してもらいました。両選手の活躍は、子どもたちの刺激になっており、五輪終了後に、前田選手が中心となって開催した町内でのスキー講習会では、たくさんの子どもたちが楽しむ姿を見ることができました」

倶知安町は今年、『スキーの町』を宣言してから50周年を迎える。

これまで、長くスキーに関わってきた一人として、このまちの『スキー文化』を未来につなげて欲しいと話す。

「子どもたちには、まずはスキーに挑戦して、スキーを楽しんでもらいたいです。この地域は、とても環境に恵まれており、スキーに限らず、さまざまなことに挑戦すること、自分の可能性を広げて欲しいと思います」

廣瀬さんは、50年近くにわたりスポーツ少年団と関わり続けているが、これから先も、変わらず活動が続いて欲しいと願う。

「自分が少年団で教えた子どもたちが、指導者になって今の子どもたちを教えています。今後も、『子どもたちが大人になったときに、次の世代を指導者として育てる』。そんな未来が続いていくと信じています」

※まちひとしごとは不定期連載です